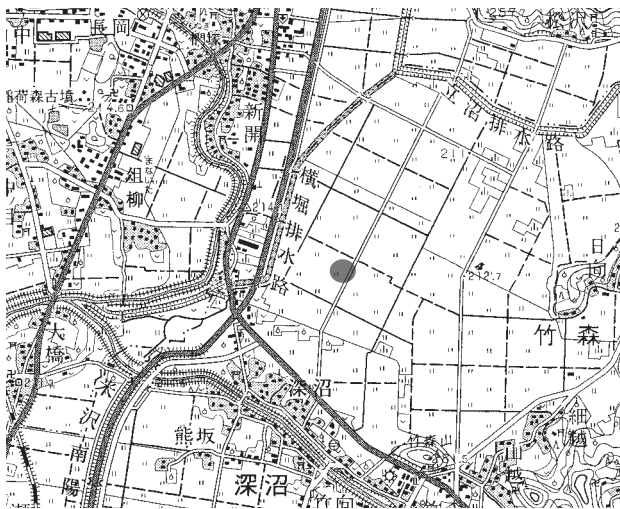


# おんだし 押出遺跡 (第6次)

遺跡番号 381-313  
調査回数 第6次  
所在地 山形県東置賜郡高島町大字深沼字押出  
北緯・東経 38度1分44秒・140度10分16秒  
調査委託者 東日本高速道路株式会社 東北支社 山形工事事務所  
起因事業 東北中央道(南陽高島～山形上山)に係る付替え水路工事  
調査面積 125㎡  
受託期間 平成27年10月1日～平成28年3月31日  
現地調査 平成27年11月2日～12月25日  
調査担当者 水戸部秀樹(現場責任者)・岩崎恒平  
調査協力 高島町教育委員会  
遺跡種別 集落跡  
時代 縄文時代  
遺構 盛土遺構  
遺物 縄文土器・彩漆土器・石器・木製品・漆塗り糸・種子(文化財認定箱数:630箱)



遺跡位置図(1:50,000)

## 調査の概要

押出遺跡は、「大谷地」と呼ばれる泥炭層が広がる湿地の中に位置している。火山性の陥没地形が湖沼化し、後に湿地となったものであり、その名残が大谷地の北側に残る白竜湖である。現在は乾田となり、機械化された農作業が行われているが、昭和30年代頃までは舟を使って刈った稲を運搬する姿が見られたほど軟弱な土地であった。

遺跡の発見は、1969・1970年に行われた沼尻堀排水路の浚渫工事で排出された土砂から、土器や石器が拾い上げられたことが契機となった。1985年からは国道13

号南陽バイパス建設工事を起因とした3カ年に及ぶ発掘調査が行われ、地表下約2.5mの地点から住居跡39棟、集石遺構1基が検出された(図1)。中には「転ばし根太」と呼ばれる横に並べた丸太材を基礎として盛土を構築するという特殊な住居群も含まれる。また、通常の遺跡では残りにくい有機質遺物、彩漆土器、木胎漆器などの貴重な遺物も出土した。後に主要な遺物約1,100点が国の重要文化財に指定されており、高島町にある山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館で展示している。

2011年からは沼尻堀排水路の改修工事を起因として、2カ年にわたる発掘調査を行った。第4次調査では、4基の盛土遺構が検出され、1～3次調査で検出された遺構群がさらに東側へ広がることが確認された(図1)。第5次調査では、調査区一帯に遺物の廃棄された窪地が検出され、盛土遺構群の広がりが第4次調査区より東側までは続かないことが確認された。また、東へ拡張した調査区からは径の大きい木材を利用した打ち込み柱群が検出された。出土した遺物は、第1～3次調査のものとはほぼ同じ内容で、土器・石器のほか彩漆土器、木製品、縄などである。

今年度行った第6次調査は、東北中央自動車建設に伴う付替え水路工事に起因して行われた。これまでの調査区

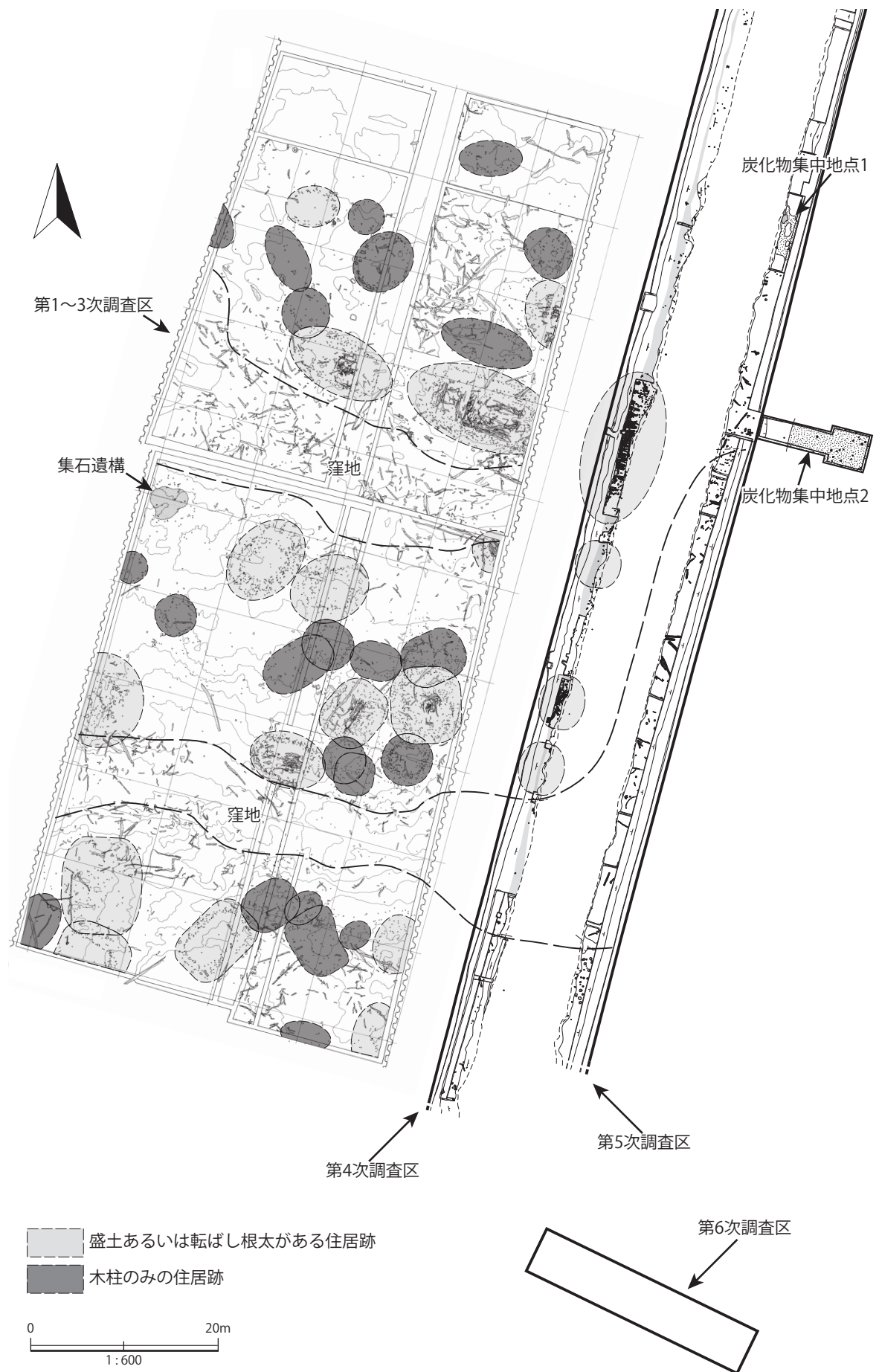


図1 第1~6次調査遺構配置図



写真1 盛土遺構上遺物出土状況, 東から

基は、盛土遺構どうしの中に粘質土が積み増しされて結合していた。2基の盛土遺構が結合して、最終的に一つの盛土遺構として使用されたと考えられる。結合した盛土遺構のうち、東側の盛土遺構は砂を、西側の盛土遺構は粘土を基層としてその上に粘質土を盛っている（写真2）。

盛土上面に残された多数の遺物は、当時の人々がこの地を去った状況がそのまま残置されたものと考えられる。遺物は、盛土の中央部に比べ、周辺部から多く出土しており、盛土の中央部から周囲に向かって土器や石



写真2 盛土遺構断面, 北東から

器などを廃棄した様子うかがえる。

盛土を除去すると、多数の打ち込まれた杭（柱）が盛土の周縁部分から検出された（写真3）。調査区内では100本程度検出されているが柱の径、打ち込まれた深さも一定ではない。浅いものでは20cm程度、深いものは2m程度に達し、大きく傾いているものも多い。地上部分が腐朽して残っていない状態の柱痕、あるいは盛土の流失を防ぐ土留め用の杭と考えられている（写真4）。

盛土上には、炉跡や柱穴などの建物の痕跡とかがえられる遺構は確認できなかった。



写真3 盛土除去後の杭（柱）などの検出状況, 北東から



写真4 打ち込まれた杭（柱）, 東から

の中では最も南よりの位置（図1）であり、集落全体の構造を考える上で重要な調査となる。

### 遺構と遺物

遺構は、盛土遺構が3基検出された（写真1）。うち2

出土した土器は、東北地方南部の土器型式である大木4式（写真5）に属するものが多く、北陸地方の刈羽式土器とされている土器も少量含まれる。石器（写真6）では、石鏃、石鏃未製品、押出型ポイント、石匙、磨石、石皿



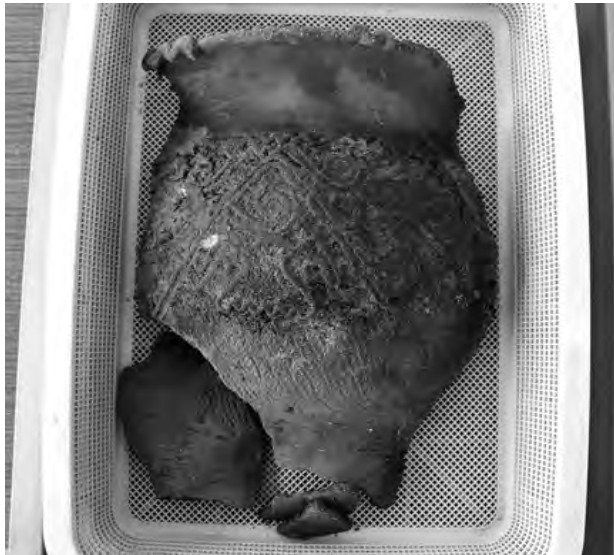


写真5 大木4式土器



写真7 壺形彩漆土器



写真6 石器（左上：石鏃，左下：石鏃未製品，中央・右：押出型ポイント）



写真8 出土状況

写真9 上から

などが出土している。また、盛土上で石器の製作を行ったらしく、大量の剥片、微細剥片が出土した。

これまでの押出遺跡の発掘調査で出土した彩漆土器はいずれも鉢形ばかりであったが、今回の調査では壺形のものが初めて出土した（写真7～9）。文様はこれまでと同じく赤漆の下地に黒漆により斜線や渦巻きを描くものである。また、口縁部には連続した貫通孔が水平に並んで空けられている。さらに上方から見た形は角丸方形すみまるとなっており、非常に独自性の高い器形と言える。

漆に関するものとしては、塗の容器や漆塗り糸（写真10）なども出土している。漆塗り糸は、赤漆を塗った糸であるが、漆膜のみが残っており内部の糸はなかった。糸は直線状であり、元来玉状にまとめられていたかどうかは分からない。

地山面から約1.5m掘り下げたところ、縄文早期末に属する縄文条痕文系土器（写真11）や石器、炭化物など



写真10 漆塗り糸

写真11 下層出土の土器

が出土した。遺物は粗砂層に含まれており、河川の氾濫により遺跡内に運ばれたものと考えられる。

### まとめ

今回の調査区で見つかったのは盛土遺構の北半分程度であり、さらに南側へ向かって盛土遺構をはじめとした遺跡の範囲は広がることが分った。湿地の西側には第1～4次調査で検出された遺構群、南側には第6次調査で検出された盛土遺構が配置されている。今後は、湿地の縁辺部でどのような生活が営まれていたのか、出土遺物や調査記録から詳しく検討していく予定である。